

Relationship between OTANI Shoshin (大谷勝真)
and AKEGARASU Haya(暁烏敏) : Addendum to
“On the Postcard Addressed to AKEGARASU
Haya which was Insert in Daitoyochizu Sakuin(
大東輿地図索引) in AKEGARASU BUNKO(
暁烏文庫)”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: FURUHATA, Toru, MURAKAMI, Keima メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00069251

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



大谷勝真と暁烏敏

— 「暁烏文庫『大東輿地図索引』に挟み込まれていた 暁烏敏宛の葉書について」補遺—

Relationship between OTANI Shoshin (大谷勝真) and AKEGARASU Haya(暁烏敏) : Addendum to “On the Postcard Addressed to AKEGARASU Haya which was Insert in *Daitoyochizu Sakuin*(大東輿地図索引) in AKEGARASU BUNKO(暁烏文庫)”

古畑 徹(1)・村上 慧馬(2)

FURUHATA Toru, MURAKAMI Keima

(1) 金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系

Faculty of Letters, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

(2) 金沢大学大学院 人間社会研究科 人文学専攻 2022 年修了

Completion of Master's Course, Human and Social-Environmental Studies, Kanazawa University, 2022

Abstract

In the previous paper, we introduced a postcard from OTANI Shoshin(大谷勝真) to AKEGARASU Haya(暁烏敏), which was newly discovered among the pages of *Daitoyochizu Sakuin*(大東輿地図索引) in AKEGARASU BUNKO(暁烏文庫), Kanazawa University Library, and discussed several issues related to it. After the presentation of the previous paper, it was discovered that the reading of the postcard was incorrect, so this paper first presents a new reading. Next, we examined AKEGARASU Haya Zensyu (暁烏敏全集). We found numerous articles about OTANI Shoshin, which revealed that the close relationship between OTANI and

AKEGARASU began. At the same time, OTANI was a student at the Fourth High School (old-education-system), and continued until his death. Furthermore, since OTANI was found to be a graduate of the Fourth High School, we have clarified OTANI's movements as seen in the documents of the Fourth High School and its alumni association. These are the foundational tasks for rediscovering the forgotten oriental historian OTANI Shoshin.

はじめに

私たちは本『金沢大学資料館紀要』の前号(17号、2022年3月)に「暁烏文庫『大東輿地図索引』に挟み込まれていた暁烏敏宛の葉書について」(以下、前稿と略す)と題する論稿を発表し、新たに金沢大学附属図書館暁烏文庫所収の『大東輿地図索引』(京城帝国大学法文学部、1936年)の頁の間から発見された、昭和11(1936)年10月29日¹の消印がある大谷勝眞²より暁烏敏宛の葉書(以下、本葉書と呼ぶ)を写真入りで紹介し、それをめぐりいくつかの問題に論及した³。発表後、前稿を読まれた本金沢大学歴史言語文化学系の上田長生准教授(日本近世史)より当該葉書裏面の積読試案が古畑のもとに寄せられた。古畑はこれを村上に送付し、前稿積文の訂正とその公表の必要性を確認するとともに、その後も継続しておこなっていた調査情報を交換し、一つにまとめて前稿の「補遺」を作成することとした。

ただし、調査はまだ途中であり、まとまった結論が得られたわけではない。それでもここに研究ノートの形で現在の調査状況を報告するのは、葉書裏面積文は大幅な訂正が必要で、その公表は緊急性を要すると考えられること、大谷勝眞と暁烏敏との関係についてはかなりの事実が明らかとなり、特にそこから大谷と本学の前身校である旧制第四高等学校(以下、四高と略す)との関係が明らかとなって、本学の歴史を研究する上で大谷の経歴や業績を追うことに十分な意味があると考えられること、そしてそれを公表することが新たな情報を入手する上で有効と考えられること、による。また、本稿での報告内容は、古畑が行った大谷と暁烏の関係の調査結果とそこから派生した調査が中心となるため、それをメインタイトルとし、著者順も前稿と入れ替えた次第である。

1. 大谷勝眞より暁烏敏宛葉書の裏面積文の訂正

前稿では、本葉書の裏面の写真を掲載し、脇にその積文を掲載した。本稿でも写真を再掲したうえで(図1)、上田長生准教授よりのご提案を受けて訂正した積文を掲載する。ついで、文意を明確にするため、古畑による書き下し文と現代語訳を掲載する。

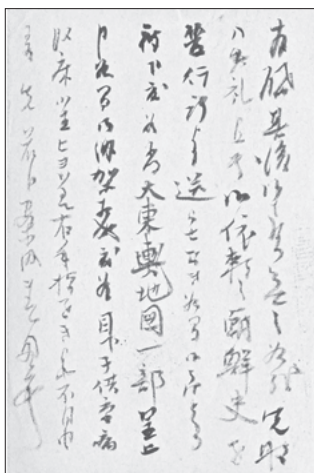


図1 暁烏敏宛葉書裏面

【積文】

- 1 拝啓 其後御さわり無之候哉、先般
- 2 ハ失礼申候共、御依頼之朝鮮史を
- 3 発行所より送らせおき候間、御うけとり
- 4 被下度候、尚大東輿地図一部呈上
- 5 申候間、御納架相成度候、目下子供重病
- 6 ノ床、小生ヒヨハにて右手指をきられ、不自由
- 7 に候、先ハ右御案内まで 敬具

【書き下し文】

拜啓 其の後御（お）さわり之（これ）無く候（そうろう）哉（や）、先般は失礼申し候（そうら）え共（ども）、御依頼之（の）朝鮮史を發行所より送らせおき候間（あいだ）、御うけとり下さ被（れ）度（たく）候、尚（なお）大東輿地図一部呈上申し候間、御納架相（あい）成り度候、目下子供重病の床、小生ひよわにて右手指をきられ、不自由に候、先（まず）は右御案内まで 敬具

【現代語訳】

拜啓 その後ご体調を崩されることなどありませんでしたでしょうか。先般は失礼を申しあげましたが、ご依頼の『朝鮮史』を發行所から送らせておきましたので、お受け取り下されたく思います。なお、『大東輿地図』一部も呈上申しあげましたので、ご配架していただきたく思います。目下、子供は重病の床についております。小生はひ弱なため右手の指をきってしまい、不自由な状態でございます。とりあえずは、右お知らせまで。 敬具

以上の現代語訳からすると、前稿で推定した葉書本文の内容を特に修正する必要はなさそうである。ただし、朝鮮総督府朝鮮史編修会編『朝鮮史』の送付が「發行所」から直接であった点は、少し解説が必要と思われる。

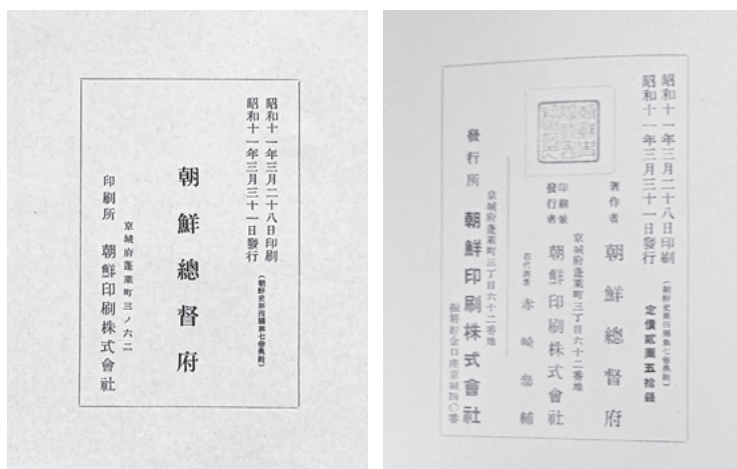


図2・3 『朝鮮史』第4編第7巻の奥付。図2が非売品、図3が販売用。

『朝鮮史』の奥付には、二通りのものが存在する。一つは、右側に印刷日・発行日を2行で記し、その下に小さな太字で「(朝鮮史第○編第○巻奥付)」と記し、ついで中央に「朝鮮總督府」を大きく記して発行者であることを示し、さらにその左に2行で「京城府蓬萊町三ノ六二/印刷所 朝鮮印刷株式會社」と書かれたものである(図2)。もう一つは、右側の印刷日・発行日、その下の巻数奥付の表記は同じだが、奥付表記の左に価格があり、中央には、上部に3行の「朝鮮史/編修會/編印」と篆刻された朱の角印が押され、その下右に「著作者 朝鮮總督府」、左に「京城府蓬萊町三丁目六十二番地/印刷兼發行者 朝鮮印刷株式會社/右代表者 赤崎參輔」、ついでその左に短い縦線が引かれ、さらに左に「京城府蓬萊町三丁目六十二番地/發行所 朝鮮印刷株式會社/振替貯金口座京城四〇番」とあるものである(図3)。前者が非売品、後者が販売用である。

ここからすると、本葉書の「発行所」とは朝鮮印刷株式会社のことと考えられる。前稿では、『朝鮮史』の送付を暁鳥が大谷に依頼して購入したのではなく、大谷が発行元の朝鮮総督府の朝鮮史編修会に暁鳥への無償の配布を交渉し、それが成功して直接配布されたものと想定した。また、前稿の注30では、暁鳥が受け取った『朝鮮史』の大半は販売用であったが、第5編第5巻だけは配布用であり、1冊でも配布用が入っている以上、朝鮮史編修会からの直接配布と考えるべきと指摘した。本稿の葉書積文の修正で、「発行所」から送付されたことが判明したが、それはあくまで送付作業を行う場所が発行所であるというだけで、朝鮮史編修会から無償で配布された事実を疑う必要はない。おそらく『朝鮮史』は大部になるので、朝鮮史編修会で在庫を保管するのではなく、朝鮮印刷株式会社の方で在庫を保管していたのであろう。ただ、前稿は「直接配布」と表現し、送付作業を朝鮮史編修会自体が行った可能性を含んでいた。その可能性はないことが判明したので、ここで前稿のこの表現を「配布」のみに修正する⁴。

なお、本葉書の最後の3行は前稿では十分に読めなかったが、本稿の訂正で子どもの病気と、自身の右手指の負傷を記していることがわかった。これは事実であったとしても、恐らく葉書による連絡が遅くなったことと、乱筆乱文であることの「言い訳」と解釈すべきであろう。

2. 『暁鳥敏全集』に見える大谷勝眞についての記述

本葉書の差出人である大谷勝眞は、昭和11年当時、京城帝国大学法文学部東洋史学科第一講座教授であり、朝鮮総督府の朝鮮史編修会委員でもあった。それゆえ、暁鳥への『朝鮮史』の無償配布がなかったのである。ただ、前稿でも指摘したが、大谷の生涯や業績を記したものは極めて少なく、忘れられた東洋史学者という観がある。そのことは、大谷勝眞の名前のフリガナがCiNiiでは「オオタニ, カツマ」となっていることに象徴的に表れている。彼は『東洋学報』に多く執筆しているが⁵、『東洋学報』は発刊当初より裏表紙に掲載論稿の英文タイトル・著者名を記している。そこで大谷の名前を確認すると、「S. Ōtani」となっている。ファーストネームのイニシャルがSである以上、彼の論稿執筆における名前が「カツマ」ということはありえず、「勝眞」は「ショウシン」と読むべきであろう。

大谷勝眞については、上述のようにあまり知られていないということもあり、前稿では『官報』などを使ってその生涯を調べたうえで、暁鳥敏との関係を検討した。そこで述べたことを要約すると次のようになる。

大谷勝眞（1885-1941）は、真宗大谷派第21世大谷光勝（1817-1894）の孫で、東洋史学者であると同時に真宗大谷派の僧侶である。東京帝国大学文科大学史学科を明治41（1908）年に卒業し、学習院大学で教鞭を執ったのち⁶、大正15（1926）年に京城帝国大学に本科が設置されると法文学部教授に補任された。翌昭和2（1927）年には2年間、在外研究員として欧州に留学した。この時にベルリンで筆写した敦煌文書のノートは、その文書が戦争で散逸したため、現在では貴重な史料となっている。帰国後、昭和6（1931）年11月からは朝鮮史編修会委員として『朝鮮史』の編纂にも加わったが、昭和16（1941）年12月7日、丹毒のため56歳で死去した。暁鳥敏とは、ともに真宗大谷派の僧侶であったことから付き合いがあったと考えられ、『暁鳥敏全集』を調べてみると、昭和11年10月3日～7日の京城滞在時に大谷勝眞に会っていて、その折に『朝鮮史』の配布を依頼したとみられる。その後、昭和15年にも京城に滞在し、5月12日に大谷を訪問しており、両者は親しい関係にあったとみられるが、両者の昭和11年

以前の関係については調査不足で不明である。

前稿発表後、この調査不足を補うべく『暁鳥敏全集』のなかで日々の随想や手紙・日記等を集めた第21巻以降に大谷勝眞についての記載はないか、調査した。その結果、しばしばその名前が登場していることがわかり、それを巻末の別表にまとめた。そのNo.16は大谷勝眞の追悼文で、そこには暁鳥と大谷の関係のまとまった記述があった。それが次の文章である⁷。

□旧臘七日には大谷勝眞師が往生せられた。師は大谷派の連枝で光演上人の従弟である。つとに東大に東洋学を修め、久しく京城大学の教授として御奉公をしてゐられたのである。まだ六十才になられないのに丹毒で死なれたと聞いて一層名残りが惜しまれる。四高在学時代には、拙宅に来られたこともあるし、昭和二年にロンドンにいつたをりには、共にシェークスピアの遺跡をたづねたこともある。朝鮮にいけば、いつでもおめにかゝつていろいろお話をするのが例となつてゐた。いよいよこれから佛教のために一層お骨折りが願はれると思つてゐたのに、御往生の報に接して残念な気がする。

この記述は、『願慧』昭和17年2月号の「雑記」の一つである。「旧臘七日」とは、旧年、つまり昭和16(1941)年12月(臘月は12月の別号)7日という意味で、前稿で記した大谷の没年月日と一致する。このころの暁鳥は、友人の死去の報に接すると、その人物の訃報追悼記事を必ず『願慧』に掲載し、その人物の経歴やその人物との思い出を綴っており、そうした記事の一つである。

ここに書かれている大谷との思い出の内容は、日記や随想等で確認することができる。大谷が四高生で、その在学中に暁鳥宅に来たということの関係記事は、附表のNo.1~4にある。それらによれば、明治36(1903)年11月15日に暁鳥と大谷は西大谷御廟(金沢市尾山町の大谷廟所)の道友会で初対面し、3日後の18日には共に四高教授であった林並木(1873-1958)⁸を訪ねて夕食をごちそうになり、21日には大谷が暁鳥宅を訪問し、翌日金沢に戻っている。明治36年は、当時26歳であった暁鳥敏にとって特別な年で、最初の妻であった親友・佐々木月樵(1875-1926)の妹・山田房子と結婚をした年であり、かつ恩師・清沢満之(1863-1903)が亡くなって、彼が開いた真宗大学生のための私塾・浩々洞の代表となった年である。この年の日記を見ると、その活発な活動の様子がよくわかり、浩々洞のある東京・本郷との間を何度も往復するとともに、金沢に何度も足を運び、林並木ら四高教授や四高の学生達と頻りに接触している。その後親交を深める西田幾多郎と初めて会ったのもこの年で、それも11月14日に林とともに三々塾を訪ねてのことである⁹。そうした活動のなかで、大谷家の若き御連枝である大谷勝眞と出会い、急速に親交を深めたものとみられる。

昭和2(1927)年にロンドンで会って、ともにシェークスピアの旧跡(上述の附表No.16の引用では「遺跡」と表現)を見たことについては、附表No.12で確認できる。二人がロンドンで再会したのは6月11日、ともにシェークスピアの旧跡を訪ねたというのは6月14日である。暁鳥は大正15(1926)年12月にインド旅行に出発し、その足で欧州を回り、昭和2年7月にシベリア鉄道・朝鮮経由で帰国した¹⁰。大谷が昭和2年3月から在外研究員として欧州視察に行ったことは前稿で述べたが、6月にはイギリスのロンドンにいたのである。大谷の欧州行きは、暁鳥の旅行中であり、この間、どのように連絡を取り合ったのかは史料がなく、不明である。当時であれば電報によると推測されるが、少なくとも数回のやり取りがあったことは想像に難くない。この再会からは二人の親密度が伺える。

朝鮮に行くたびに会っていたということについては、附表No.13・14に見える。これについては既に前稿で指摘したもので、暁鳥の朝鮮訪問は、昭和2年の欧州旅行のあと、昭和11年と15年の2回ある。そのいずれでも会っているため、「朝鮮にいけば、いつでもおめにかゝつていろいろお

話をするのが例となつてゐた」と表現したものと考えられる。

以上のように二人の関係を見てくると、若い時から親しく、自分より若干若くて、京城帝大教授としても活躍していた大谷勝真に、暁鳥は今後の大谷派を背負う者としてかなりの期待をしていたのではないかと思われる。追悼文の最後の一文は、「御往生の報に接して残念な気がする」で締め上げるために、あっさりした印象を与えるところがあるが、その前段の「いよいよこれから佛教のために一層お骨折りが願はれると思うてゐたのに」には、かなりの無念の思いが滲み出ていると理解してよいであろう。

3. 四高及び四高同窓会資料に見える大谷勝真についての記述

『暁鳥敏全集』には、大谷勝真が四高生であったとの記述があるが、前稿の時点で調査した大谷勝真に関する諸研究・諸記事にはこの経歴は載っていなかった。その後、井上直樹氏が、昭和8(1933)年の外務省文化事業部対滿文化事業の一つとして大谷勝真による『『備辺司膳録』満蒙関係記事抄録事業』を詳述していること¹¹に気が付いたが、ここにも大谷の経歴として四高出身であるとの記述はなかった。おそらく今までほとんど知られていなかったのであろう。

では、大谷は四高にいつ入学して、いつ卒業したのか。これについては金沢大学資料館に当時の学籍簿が残されている¹²。それによれば、彼の名前の前に「京都華」とあり、本籍は京都府で、華族身分であったことが明記されている。ちなみに真宗大谷派では、勝真の伯父に当たる大谷光瑩(1852-1923)が明治29(1896)年に伯爵に列せられ、一族が華族として扱われるようになった。また、勝真の生年月や出身中学も記され、生年月は「明治十八年三月」、出身中学は「入学前履歴」の項に「京都第一中学卒業」とある。肝心の入学と卒業だが、「入学月日」に「明治卅五年九月十一日」とあり、「学業」の3行目に「明治卅八年七月大學豫科第一部第三年卒業」とある。つまり、明治35(1902)年9月11日に入学し、明治38年7月に卒業したのである。この間、留年はしておらず、順調に3年間で卒業したのである。彼が暁鳥に会ったのは四高2年の時で、18歳であった。

また、彼が所属した第一部というのは、法科・文科の学生が属するところで、そのなかで履修する外国語によってクラス分けがされていた。クラスと所属生徒の一覧は、『第四高等学校一覧』(以下、『四高一覧』と略す)に記載されており、彼が在籍していた時のそれを見ると、1年の時は甲組で、これは「法科文科(獨法科獨文科ヲ除ク)」と注記されている¹³。ドイツ語以外ということは、英語履修ということである。2年の時は乙組で、注記は同じ¹⁴。3年の時はクラス名称が変わって「文科」となり、「獨文科ヲ除ク」と注記されている¹⁵。なお、1年のクラスは35人、2年は36人、3年は20人である。3年のクラス人数が少ないのは、法科と分かれたからである。

卒業後についても『四高一覧』に「卒業生」という項目があり、各年度の卒業生ごとにどこの大学のどの学部に進学し、どういう学位を取ったかが簡単に記されている。大谷の場合は、卒業直後である明治38-39年度の『四高一覧』から3年度にわたって、「卒業生」の「明治三十八年七月卒業」の「第一部 文科 哲学及其他」の項に、「在文 大谷勝真 京都華」と掲載されている¹⁶。「在文」とは東京帝国大学文科大学(のちの文学部)に在籍しているという意味である。その後の明治41-42年度の『四高一覧』には、「文 大谷勝真 京都華」とある¹⁷。「文」とは文学士のことであり、東京帝国大学を卒業し文学士の学位を取得したことを意味する。前稿で東京帝国大学文科大学卒業を、川邊雄大氏のシンポジウム発表資料をもとに明治41(1908)年と記したが、それはここからも裏付けられる。以後、昭和15年以前の卒業生の記載が省略される昭和16年度の『四高一覧』まで、

途中の大正13年度の『四高一覧』で身分記載が無くなる以外、同じ記載が続いている。大学卒業以降のことで『四高一覧』で確認できるのはここまでである。

四高卒業後の大谷の動向を知ることができる、もうひとつの四高関係資料が、同窓会の資料である。ただし、四高同窓会の発足は大正15（1926）年5月なので、それ以降において大谷がどのように四高同窓会とかかわったのかということしかわからない。それでもその動向を一通り追うことは、大谷の経歴・生涯を明らかにする上での基本作業なので、ここでその調査結果を報告する。

四高同窓会は、発足以降、年に2回のペースで『同窓會報』を発行していた。この存在は意外に知られておらず、国立国会図書館には所蔵がなく、金沢大学のOPACでも出てこないし、CiNiiで検索しても所蔵館はない。しかし、実際には金沢大学の中央図書館特別資料室に昭和18年1月10日発行の31号までの全号が保管されている¹⁸。以下はその調査結果である。

『同窓會報』第1号は大正15年11月5日に発行され、本文冒頭から同窓会発足に関する諸文書が掲載されている。そのなかに発起人の一覧があり、大谷はそこに名を連ねている¹⁹。また、同窓会ではしばしば記念事業が行われることがあり、それについての諸文書も『同窓會報』に掲載される。四高の西洋史の教授であった浦井鏗一郎（1868-1932）が亡くなった際には、記念事業会が立ち上がったが、その時の発起人名簿が『同窓會報』14号（昭和8年6月28日発行）に掲載されており、そこにも大谷の名がある²⁰。

大谷と同窓会のかかわりで注目されるのは、彼の赴任先である朝鮮の京城に置かれた「京城四高会」での活動である。四高同窓会は各地に支部があり、そこからの報告も『同窓會報』に掲載された。「京城四高会」の報告が最初に載るのは、『同窓會報』12号（昭和7年5月31日発行）である。ここには昭和7年春季例会が同年2月10日に、京城本町の江戸川支店にて行われたこととともに、出席者31名の名簿があり、そこに大谷の名がある²¹。その後の『同窓會報』で「京城四高会」の会合報告が登場するのは、13号（昭和7年10月28日発行）、14号、16号（昭和9年6月20日発行）、22号（昭和12年7月6日発行）、26号（昭和14年7月10日発行）である。それらには会員名簿、会合出席者名簿、あるいは出席者による寄せ書きのうちのどれかが必ず載せられており、そのすべてに大谷の名がある²²。特に22号の記事の最後には、「當分の間連絡方は左記の所を事務所と致置候間御氣付の点有之候節は御報告御願申上候」とあり、左に2行に分けて「京城府倭城臺官舎三号／大谷勝眞氏宛」とある。昭和12（1937）年より大谷は「京城四高会」の代表を務めていたのである。大谷は記録にある限りすべての「京城四高会」の会合に参加しており、終始その中心メンバーとして活動していたと考えて大過ないであろう。

なお、『同窓會報』31号（昭和18年1月10日発行）の「会員の住所等異動」欄の「明治三十八年」には「大谷勝眞 死亡」とある²³。実際には、先述のように昭和16年12月7日に亡くなっている。それが遅れたのは、戦争の影響で30号が昭和16年12月20日に発行された後、1年間発行されなかったためである。

おわりに

本稿では、前稿で紹介した大谷勝眞から暁鳥敏への本葉書の積文の訂正に始まり、大谷と暁鳥との関係、およびそこから派生した大谷と四高との関係へと記述を展開してきた。その調査は、次第に四高卒業生であることが判明した、忘れられた東洋史学者・大谷勝眞の発掘へと話が向かっている観がある。

とはいえ、前稿で示したように大谷は敦煌学・仏教史・西域史研究等でかなりの業績を残し、また彼が残した『敦煌文献筆写ノート』は貴重な史料としてつとに知られている。それを「忘れられた」などと書くのは、筆者たちの無学を晒すだけなのかもしれないが、近年、ポストコロニアルという視点から朝鮮史編修会や京城帝国大学などの植民地朝鮮における「帝国」日本の学知の問題が議論されている²⁴なかで、朝鮮史編修会の委員であり、京城帝国大学法文学部発足当時から教授であった大谷に触れるものをほとんど見ないからである。大正15（1926）年の京城帝国大学法文学部発足当初のメンバーには史学・東洋学関係で非常に多くの優れた業績を残した著名な研究者が多い。朝鮮史学の今西龍・小田省吾、考古学の藤田亮策、漢学の藤塚郷、朝鮮儒学の高橋亨、国文学の高木市之助、朝鮮語学の小倉進平などがそれであり、1年遅れて昭和2（1927）年には国史学の田久保潔、国語学の時枝誠記、宗教学・朝鮮巫俗研究の赤松智城、さらに昭和3年には渤海史で著名な鳥山喜一も東洋史学第二講座の教授として加わっている。そうしたなかで大谷勝眞が「埋もれている」のは明らかである。しかし、大谷は発足当初から東洋史学第一講座を担い、多くの業績を積み重ねてきている。それだけに、彼が京城帝国大学の学知のなかでどのような位置にあり、どのような役割を持っていたのかを、改めて考えてみる必要があると思うのであり、そこから従来の研究に照射できるものがあるように思うのである。本稿はそのための基礎作業なのである。

ちなみに、上記の京城帝国大学法文学部発足メンバーのうち、少なくとも高橋亨・田久保潔は四高の卒業生であることが知られており、大谷とともに東洋史学を担った鳥山喜一は戦後に四高の校長となっている。これらの人々の動向やネットワークを明らかにすることは、四高卒業生の特色やネットワークがどのようなものであったかを考えるうえでのモデルケースともなるであろう。本稿はそこへ向けての基礎作業でもある。

謝辞：本葉書裏面の釈文を解説しなおしていただいたうえに、その本稿への掲載も快く承諾していただいた、本学歴史言語文化学系の上田長生准教授に改めて感謝申し上げます。

註

- 1 前稿32頁では本葉書の発出日を「11月29日」と記したが、「10月29日」の誤植である。ここに訂正する。なお、本葉書の発出日が「10月29日」であることは、前稿28・29頁に写真入りで紹介した消印の年月日から明確である。
- 2 大谷の名前については、史料によって「勝眞」と記すものと「勝真」と記すものがある。本葉書や後述する四高の学籍簿、同窓会の寄せ書きなどでは「勝真」と書いているが、彼が書いた諸論文や記事などでは著者名・執筆者名が「勝眞」となっている。また、後述する外務省文化事業部対滿文化事業についての資料でも専ら「勝眞」が使われている。どちらの字体が妥当かは判断しがたいが、本稿本文では「勝眞」と記述する。ただし、史料が「勝真」となっている場合、引用ではそのまま「勝真」と記述した。
- 3 前稿では本葉書の現在の所在について言及しなかったが、附属図書館に確認したところ、村上の指摘を受けて、中央図書館特別資料室の暁鳥文書（葉書や日記類）の近辺に村上の解説文付きで封筒に入れて保管しているとのことである。
- 4 朝鮮印刷株式会社は、京城帝国大学法文学部編『大東輿地図 奎章閣叢書第2』（本編・索引）の印刷所でもある。したがって、葉書のもう一つの用件であった本書の送付も、この会社で

- 送付作業が行われた可能性が高い。
- 5 大谷勝眞の著作（著書以外）については、前稿35頁の附表1参照。これによれば、『東洋学報』に7本の論稿を発表している。
 - 6 前稿では、大谷勝眞の学習院大学教授補任を「大正9（1920）年4月1日付」としたが、その後の点検でそれが誤りで、正しくは「大正9（1920）年6月18日付」であることが判明した。また、この記述の根拠を、注12で「〔叙任及辞令〕（『官報』第2363号大正九（1920）年六月一八日付）第四面中段」としたが、『官報』の号数に誤りがあり、正しくは「（『官報』第2364号大正九（1920）年六月一九日付）第八面上段」である。いずれもここで訂正する。
 - 7 原載は『願慧』昭和17年2月号「雑記」。
 - 8 林並木は高知県出身。明治31（1898）年に東京帝大英文科を卒業し、京都の大谷大学（当時は真宗大学）教授となり、明治35年に四高の教授となった。登山家で、「四高山岳部育ての親」と言われる。林の経歴・人物像等については、團野光晴「学校山岳部のパイオニア・旧制第四高等学校旅行部の研究一部機関誌『BERG=HEIL』に見るその登山活動と思想（その二）一」（『石川工業高等専門学校紀要』44、2012）参照。
 - 9 『暁烏敏全集』第26巻246頁。
 - 10 「インド佛蹟巡拝記」「ヨーロッパ紀行」（『暁烏敏全集』第26巻1-250頁）
 - 11 井上直樹「満洲国と満洲史研究—アジア歴史資料センター所蔵文書の分析を中心に—」（『京都府立大学学術報告「人文』』70号、2018）。
 - 12 『明治二十九年九月 大学予科学籍簿 従明治二十九年入学者〔至明治三十五年入学者〕 教務掛』資料番号200201070359
 - 13 『第四高等学校一覧 自明治三十五年至明治三十六年』（第四高等学校、1902）、91頁。なお、金沢大学附属図書館のOPACでは『第四高等学校一覧』の所蔵場所として医学図書館貴重資料室しか出てこないが、実際には中央図書館特別資料室にも揃っている。
 - 14 『第四高等学校一覧 自明治三十六年至明治三十七年』（第四高等学校、1903）、83頁。
 - 15 『第四高等学校一覧 自明治三十七年至明治三十八年』（第四高等学校、1904）、81頁。
 - 16 『第四高等学校一覧 自明治三十八年至明治三十九年』（第四高等学校、1905）、138頁。『第四高等学校一覧 自明治三十九年至明治四十年』（第四高等学校、1906）、138頁。『第四高等学校一覧 自明治四十年至明治四十一年』（第四高等学校、1907）、134頁。
 - 17 『第四高等学校一覧 自明治四十一年至明治四十二年』（第四高等学校、1908）、130頁。
 - 18 金沢大学中央図書館特別資料室以外では、石川県立図書館に昭和6～15年の16号分（10・13～24・26・27・29号）、金沢市立玉川図書館に10号分（3・12・13・15～18・20・27・30号）の所蔵が確認できる。なお、本同窓会報は、東京四高会が1988年から2013年まで刊行していた『北辰：四高同窓会報』とは別のものである。
 - 19 『同窓會報』第1号（第四高等学校同窓会、1925）8頁。
 - 20 『同窓會報』第14号（第四高等学校同窓会、1933）22頁。なお、この記念事業の一環として浦井の蔵書が四高に寄贈されたが、その一部は現在も金沢大学中央図書館に浦井文庫として配架されている。浦井の生涯と文庫については、「浦井文庫」（『こだま：金沢大学附属図書館報』10号、1971年7月10日発行、3頁）参照。
 - 21 『同窓會報』12号（第四高等学校同窓会、1932）33頁。
 - 22 『同窓會報』各号の「京城四高会」報告記事の内容と掲載頁については、次のとおり。

- 13号：寄せ書き、44頁／14号：京城四高会同窓会名簿、57頁、寄せ書き、63頁／16号：寄せ書き、34頁／22号：会合出席者名簿・寄せ書き、62頁／26号：寄せ書き、63頁。
- 23 『同窓會報』31号（第四高等学校同窓会、1943）61頁。
- 24 朝鮮史編修会を正面から扱ったものとしては、李成市「コロニアリズムと近代歴史学—植民地統治下の朝鮮史編修と古蹟調査を中心に—」（寺内威太郎・永田雄三・矢島國雄・李成市『植民地主義と歴史学—そのまなざしが残したもの—』、刀水書房、2004）。京城帝国大学の学知を扱ったものとしては、永島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』（ゆまに書房、2011）。また、2006年に刊行された『岩波講座「帝国」日本の学知』シリーズでは、第1巻「『帝国』編成の系譜」（酒井哲哉編集）、第3巻「東洋学の磁場」（岸本美緒編集）のなかで京城帝国大学の学知が扱われている。

附表 『暁鳥敏全集』第21巻～第27巻に見える「大谷勝真」の記事一覧（記事内容の年月日順）

No	日記・記事の年月日等	記事内容（短い場合は全文）	巻数頁数	出典／備考
1	明治36(1903)年11月15日	西大谷御廟で開催の道友会で、「大谷勝真氏と初対面也。」	26巻246頁	日記／金沢にて
2	明治36年11月18日	「大谷勝真君と林並木氏を訪ふ。夕飯を供せらる。」	26巻247頁	日記／金沢にて
3	明治36年11月21日	「午後三時過ぎ、大谷勝真氏来訪。くさぐさの話をす。氏は撰光院の長男にして、現に第四高等学校に在学す。夜、同氏宿す。囲碁などす。」	26巻248頁	日記／21巻335頁に同一記事掲載
4	明治36年11月22日	「午前、詩集など出して語る。午後、三時四十分の汽車にて大谷氏去る。停車場に送る。『実験之宗教』を贈る。」	26巻248頁	日記
5	明治37(1904)年	「年賀状往復」の明治37年1月5日差し出し方に「大谷勝真」の名あり。	26巻354頁	日記
6	明治38(1905)年2月19日	「富山、三ツや二君と、大谷勝真を訪ひて信を語る。」	26巻377頁	日記／東京にて
7	明治39(1906)年5月15日	「午後、(略)。大谷勝真を訪ふ。巢鴨の大谷あり。三人にて虚子を訪ふ。」	26巻478-479頁	日記／東京にて
8	明治40(1907)年1月	「通信日記発信の欄」に「大谷勝真」の名あり。	27巻12頁	日記
9	明治42(1909)年	「年賀状往復控」の「発」の「三日」に「大谷勝真」の名あり。	27巻353頁	日記
10	大正5(1916)年	「当用日記補遺欄」に「大谷勝真」の名あり。	27巻545頁	日記
11	大正10(1921)年8月10日	「夕五時精養軒で本多恵孝君の慰安会があり、らい病患者の保護の事が語られて、わしも友の顔がみたさに出席した。久しぶりで南条、大谷勝真、安藤正純等にあふた。」	27巻635頁	日記／東京にて

12	「ヨーロッパ紀行・ロンドン」昭和2(1927)年6月11・14・18日	「十一日。(略)。六時帰宅、大谷氏を訪ね、共に日本人クラブにて夕飯す。」 「十四日。国吉、大谷二君と共にシェークスピアの生家を見にゆく。午前九時、ユーストン駅発、十一時十五分コメントリ着。」生家を含むシェークスピアゆかりの地を訪ね歩き、「六時コベントにかへり、四十分発、八時四十分コメントリ着、常盤にて夕飯。」 「十八日。(略)。午後、大谷氏来たる、ゆるゆる語る。」	23巻236-237頁	『願慧』昭和3年6月号／「大谷氏」としかないが、No.16よりこれが大谷勝真であることは明白なので、大谷勝真の記事として表中に入れた。
13	「京城行」昭和11(1936)年10月4・6日	10月4日、「四時半から京城大学教授大谷勝真師を訪問、『大般涅槃經疏』のコロタイプ版をいただく。上野君同行。午前からバスにて京城見物をしてゐた平松も同行した。」 10月6日、「四時より京城大学教室で佛教青年会員のために講話。(略)。講話後大学の附属食堂にて晚餐会が開かれた。出席者は次の如し。大谷勝真、赤松智城、(略)。大谷師と佐々木君との外は皆今度始めて逢うた方々である。」	24巻181-182頁	『願慧』昭和11年11・12月号／前稿注26で紹介。なお、前稿では「京城行」の掲載頁を「117-183頁」とするが、正しくは「177-183頁」。ここに訂正する。
14	「朝鮮を廻って」昭和15(1940)年5月12日	5月12日8時40分に京城に着く。「三時から長郷、柏原、山本三君と共に大谷勝真師を訪ふ。」	24巻359頁	『願慧』昭和15年7月号。前稿注27で紹介。
15	「嵐の前」昭和16(1941)年7月11日	7月11日朝京都に着き、午前*9時本山に出頭し開講式に列席。「正午から第一回教学商議会開かる。第一部委員、大須賀、(略)、六氏出席、大谷勝真師は欠席。」	24巻403頁	『願慧』昭和16年8月号／*原文は「後」に作るが、「前」に改む。
16	「地図を塗りかへ」昭和16年12月7日	「旧臘七日には大谷勝真師が往生せられた。」以下、追悼記事。	24巻434頁	『願慧』昭和17年2月号。

注：『暁鳥敏全集』では「大谷勝真」の名前をすべて「大谷勝真」と記すので、本表ではすべて「大谷勝真」とした。